
FAIRY WIND ～妖精は風の中で笑う～

爛琥かげまる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

F A I R Y W I N D 妖精は風の中で笑う

【Nコード】

N 5 1 8 2 W

【作者名】

爛琥かげまる

【あらすじ】

そこには、頼もしい仲間がいる。そこには、大切な家族がいる。そこには、愛しい人がいる。魔導士ギルド「フェアリーテイル」で繰り広げられる、ラブありバトルありのファンタジー。◆◆◆転生・トリップ物ではありません。オリ主最強ではありませんが、そこそこ強いです。基本ストーリーは原作なぞり。

序章 ルア・レヴァティン

「エルフマン、右だ！」

「おお！ ビーストアーム“黒牛”！！」

右腕を黒い獣の腕に変質させたエルフマンが、巨大な獣に向かって飛びだした。その後ろから一人の青年が飛びあがり、右手に魔力を集中させる。瞬間、青年の鮮やかな銀の髪の毛が風に揺れる。

「疾風^{ゲイル}！！」

青年の右手から放たれた突風に動きを止める獣。その隙についてエルフマンが獣の脇腹を殴打した。獣は白目を剥き、地面に沈んだ。指がピクピクと動いているが起き上がる気配は無い。中途半端に開いた口からは唾液がだらしなく流れている。

「気絶したな」

着地を決めた青年は倒れた獣の頭部の近くにしゃがみこみ、様子を確認している。

「このくらい、漢ならば当然！」

「お疲れ、エルフマン」

「ルアもな」

青年のねぎらいに、エルフマンはニカッと笑って答えた。青年、ルア・レヴァティンはマントを風になびかせながら、獣に背を向ける。エルフマンもそれに倣い、2人で歩き出した。

「あーあ、ちゃんと報酬貰えるかねえ……要人護衛なのにエルフマンは要人を殴るし」

「う、それは……あのおっさんが『男は勉学と教養だ』なんて言うからよ……」

「まあ少なくとも移動中の危険は排除してやったんだから、最低限の報酬はもらわないとな」

要人護衛の依頼。それが彼らの今回の仕事だった。一応依頼は順調にこなしていたのだが、突然森から巨大な獣が飛び出してきたの

だ。依頼内容にモンスターとの戦闘は含まれていなかったが、当然、依頼人が獣に襲われて怪我をされては仕方ないので撃退。ルアとしてはその分の追加報酬が欲しい所なのだが、護衛対象の貴族がかなりケチくさいことと、エルフマンが要人を殴ってしまったために追加報酬は望め無さそうだ。

「とにかく一度依頼人の所に戻って、ギルドに帰ろうぜ」

「そうだな……なあ、ルア」

「ん？」

森の中を歩くルアとエルフマン。突然エルフマンがルアに話しかけた。

「あんなに強いのに、どうしてS級魔導士の試験を辞退するんだ？」

エルフマンの問いにしばらく黙るルア。少しして、言いにくそうに口を開く。

「……リサーナが死ぬ所に居合わせてない俺が言うのも何なんだけど……」

そこまで言うと、エルフマンはルアの言いたい事を悟ったのか、手を広げて制した。言わなくてもいいと言うように、ルアの言葉を遮って続ける。

「姉ちゃんを守りたいのは俺も同じだが、ルアの方が強いのもわかってるさ。俺に遠慮する必要はねえよ。女を守るために力を手に入れるんだ。漢ならな！」

「ハハッ、相変わらずだな。でもやっぱり、昇級試験を受けるならお前とちゃんと戦いたいな」

「……じゃあ、今年の試験には絶対出るぜ。その時は漢として、全力で勝負だからな！」

「おう」

ひとしきり笑い合うと、二人は依頼人の元へ戻って行った。体力も魔力も消耗して疲れてはいたが、二人の心はどこかすっきりとしていた。

ルア・レヴァテインは6年前にミラやエルフマン、リサーナらとほぼ同時期に「妖精の尻尾」^{フェアリーテイル}に参加した。年が近いこともあってか、同期の彼らとはギルド内でも仲良くやっていた。ミラはエルザと仲が悪く、2人の争いに巻き込まれてナツやグレイと戦わされる羽目になったのも、何度あったことか。ルア自体はエルザと仲が悪いわけではないのだが。

さて、森から出て依頼人の待つ魔導四輪の所へ戻ってきた二人だが、当然のように依頼人からガミガミ怒鳴られた。一応の報酬はもらったので、ルアとエルフマンは釈然と無いままも帰路につくことにした。すると二人が移動用に使っていた馬車の扉が開き、中から緑色の猫が飛び降りてきた。

「おう、カーム。ただいま」

「2人共お帰り。遅かったじゃない」

「悪い、悪い」

カームと呼ばれた猫は、ルアの頭の上に乗ると疲れたように大きく伸びをした。

「あんな面倒くさい男の相手、私一人に任せないでよね」

そう言うカームだが、一人で馬車にいたところを見ると、途中で投げ出してきたようだ。

「そのくらい文句を言わずやり遂げろ！ 漢ならな！」

「私は女よ」

「ははは……そーいや例のモンスター討伐の依頼にいったエルザも、そろそろ戻ってくる頃かね」

ふと思いついたように言ったルアの一言に、エルフマンがわかりやすいほど動揺を見せた。

「お、おい……思い出させるなよ」

「怖いのか、エルフマン？」

「お、漢ならば怖いはずがない！」

ギルド「妖精の尻尾」^{フェアリーテイル}に所属している者の大半は、最強の女魔導

士と名高いエルザ・スカーレットを恐れていた。仲間思いで優しい女性なのだが、その圧倒的な強さは頼もしさと同時に恐ろしさも生む。しばらくのんびり和気藹々としていたギルドも、エルザが帰ってくればキリッとした雰囲気になるだろう。

(……いや、うちのギルドは変わんねえよな。いつだって大騒ぎだ)
ルアは一人苦笑した。笑い、笑われながら、二人と一匹は自分達の家ギルドに戻っていく。とても大切に、愛しくて、そして命をかけてまですりたい女性の待つ所へ。

「ただいま、姉ちゃん」

「ただいま、ミラ」

「3人ともおかえり！」

——その声が聞きたいがために。

序章 ルア・レヴァテイン（後書き）

というわけで、転生でもトリップでもないオリ主フェアリーテイルです。

個人的にもかなり好きな作品なので、世界観やキャラクターをぶち壊さないように慎重に書いていきます。

設定とかちゃんと固めたいので、さっそく次話から更新遅くなるかもです。ごめんなさい。

ところで、ギルド名は「妖精の尻尾」か「フェアリーテイル」どちらにした方がいいですかね。

ルビ付けようとする「尻尾」だけにかかっちゃうし、

全体にルビ付けると、IE使っていない人とかケータイで見える人には記号のまま出ちゃうし。

第1話 妖精の尻尾

フィオーレ王国

人口1700万の永世中立国——そこは魔法の世界。

魔法は普通に売り買いされ、人々の生活に根付いていた。そして、その魔法を駆使して生業とする者共がいる。人々は彼らを魔導士と呼んだ。

魔導士達は様々なギルドに属し、依頼に応じて仕事をする。そのギルド、国内に多数。

そしてとある街、とある魔導士ギルドがある。かつて、いや、後々に至るまで、数々の伝説を生みだしたギルド。

妖精の尻尾—フェアリーテイル—

フェアリーテイル

魔導士ギルド「妖精の尻尾」は朝からいつものように騒がしかった。ボロい酒飲み場だというのに、こんな風に暴れまわっていたらいつか本当にぶっ壊れてしまうのではなからうか。もともと、そんな心配をする者は、ここにはいないようだが。

「おいおい…」

俺ことルア・レヴァティンはカウンター席に座り、新聞を眺めていた。ジョッキを洗いながらミラは「どうしたの?」と聞く。

「ハルジオンの港半壊って……ナツめ、いくらなんでもやりすぎだろ」

「あらあ、さすがはナツね」

呆れる俺に、ミラは苦笑する。新聞の一面を飾っているのは、もはや原形をとどめていない大きな船と、ボロボロになったハルジオンの港の写真だ。

「罪人ボラを検挙できたからお咎め無しになったのはラッキーだったか……ん? ナツってイグニールに会いに行っただよな?」

火竜イグニールというのはナツの親であるドラゴンらしい。ハルジオンに^{サラマンダー}火竜がいるという噂をギルドのメンバーから聞いたナツは、次の瞬間にはハッピーと共にハルジオンに向かっていった。苦手な列車に乗って。

「そうね。まあでも、事件に巻き込まれるのもナツらしいといえバナツらしいじゃない」

「ミラちゃん！ こっちビール3つお願い！」

「はいはい。じゃあちよつと行ってくるわね」

俺とミラの会話を遮るように、テーブル席に酒仲間と共に座っているワカバがビールを注文した。くそつ、ワカバめ、ミラにデレデレしやがって。

ミラは慣れた手つきでジョッキ3本にビールを注ぐと、盆に乗せて運びだした。

「にしても、よく朝から酒が飲めるよな……カナはアレだけでも」いつもの賑やかな酒場をぼんやりと見ていると、ワカバがパイプからハートの形の煙を出してミラに迫っているのを見つける。その瞬間、俺は飛び出していた。

「ワカバあああ！！ ミラに手え出してんじゃねえええええ！！」

とりあえずミラを抱きかかえるようにしてワカバから離れさせ、朝から酒を飲んで「最近の若いモンは云々」という話に花を咲かせているこのオヤジに手を向けた。

「る、るるるルア！？ 朝から元気じゃねえか」

ワカバの声は若干裏返っていた。

「やかましい、ふっ飛ばされてえかあ！？」

右手に魔力がこもる。ワカバはヒィイと情けない悲鳴を上げているが、ミラは俺の後で「あらあら、困ったわね」と全然困ってないように笑っている。少し脱力。

「あ」

ミラが何かに気付いた。俺も振り返ると、入口の方から何やらドストスという足音が聞こえてくる。ちなみにワカバは隙について逃

げだしやがった。

「ただいまー!!」

幾分怒気を含んだ声を発して、妖精の尻尾の魔導士、ナツ・ドラグニルが入ってきた。後ろで小さく「ただー」と省略しながら言っているのはナツの相棒であり猫のハッピー。

「ナツ、ハッピー。お帰りなさい」

サラマンダー

ナツは挨拶もそこそこに、「火竜の情報、ウソじゃねえか!」と近くにいたギルドのメンバーを蹴っ飛ばした。大方、その男がナツに嘘の情報を与えたのだろうか。とはいえ男は蹴っ飛ばされた上にテーブルは真っ二つに崩れた。少し可哀想だ。

「あら…ナツが帰ってくると、さっそくお店が壊れそうね」

「壊れてるよ!」

うふふ、と笑うミラに、ワカバがつっこむ。

「ナツが帰ってきたってえ!? テメエ、この間の決着つけんぞ!」

グレイが早速喧嘩を吹っ掛けていているが、毎度のようにパンツ一丁だ。ひどい時はパンツすら履いていない。全く、グレイの露出癖にはこまったもんだ。

「グレイ、服」

「はっ!? いつの間に!」

しかも自覚していない。

エルフマンは「漢なら拳で語れ!」と喧嘩に参戦するが、逆にナツとグレイに吹っ飛ばされる。ロキはロキで、相変わらず女の子と一緒に喧嘩の傍観だ。

(いつでも変わらんなあ)

思わず苦笑。おっと、ミラが動き始めたから慌てて追いかける。そばでミルクを飲んでいたカームも付いてきて、俺の肩に乗った。

「あらあ、新入りさん?」

ミラが向かった先にいたのは、ミラに負けず劣らずのスタイルを持つ女の子だった。金髪の髪の毛をサイドでくくり、何故か床で伸びていることを除けば美少女だろう。腰に下げられた鞭に目が行っ

たが、とりあえず気にしないことにする。

「ミッ……ミラジェーン!? キャー、本物!」

新入りの女の子はミラを見てすぐに飛び上がると、握手をした手をブンブンと振り回した。

「何だ、ナツに連れてこられたのか?」

「ルア・レヴァテイン! すごい! こっちも本物だあ!」

俺も声をかけると、彼女の意識が今度はこちらに来了。先ほどと変わらない、キラキラとした目で俺を見上げる。

「え、何、俺ってそんなに有名なの?」

「週ソラ見ないの? あなた、結構な頻度でのってるわよ」

カームに言われるが、そもそも俺はあまり雑誌を読まない。ちなみに週ソラとは「週刊ソーサラー」という魔導士専門の週刊誌だ。

「ふーん。君、名前は?」

「あ、あたしはルーシィです」

ルーシィ、ね。ちなみに気になっていた鞭について聞いてみる。

「その鞭って、君の趣味か何か?」

「武器です!……ってか、アレ止めなくていいんですか?」

趣味じゃなかったのか。

「いいのよ、いつものことだから」

「はあ……」

「新人にはちと刺激が強いかもな」

「おふっ」

ルーシィをからかったりしていると、ナツに吹っ飛ばされたのか、グレイが突っ込んできた。ナツは得意気にグレイのパンツをひらひらとかざしている。つまりグレイは……そういうことだ。

何もまとわぬ自身の下半身を見てグレイが叫ぶ。

「あー! 俺のパンツ!」

何故かルーシィの方を向きながら。

「こっち向くなぁー!!」

「お嬢さん、よかったらパンツを貸して……」

「貸すかあ！」

デリカシーに欠けすぎているグレイに、ルーシイがビンタをかました。ははっ、確かにこりゃあ、刺激が強すぎるかな。

「ふふ、結構……」

ミラが何かを言い掛けるも、とんできた酒瓶が頭を強打。そのままぱたりと床に倒れた。

「ミラ！」

「ミラさん！？」

慌てて俺とルーシイが駆けよる。頭から血を流しているがミラは大丈夫そうだった。だが。

「結構、楽しいでしょ？」

だが、だ。

ブチンと、何かが切れる音がする。ルーシイがビクビクしながら俺の方を振り向く。新入りの子に早速面倒な所を見せつけることになるかもしれないが、そんなことどうでもいい。くそったれどもが、ミラに怪我させやがって。

「テメェら……ミラに何してくれやがったあああ！！」

足元に魔法陣が現れ、そこから突風が上に向かって吹く。その衝撃でギルドの天井の一部が吹っ飛んだが、一々気にしていたらこのギルドでやっていけない。

俺の魔力に触発されたのか、あちこちで呆れながら、はたまた嬉しそうに、様々なメンバーが魔力を解放し始める。

「あんたらしい加減にしなさいよ……」

酒樽に座りながら、カナは取りだしたカードに魔力を込める。

「あったま来た……」

「ぬおおおおおおお！！」

「困った奴らだ……」

グレイは両手を合わせ、エルフマンは片腕を石化させ、ロキは指にはめた指輪を輝かせる。

「かかってこい！」

ナツは両手から炎を噴き出して戦う気満々だ。

そうこうしている間にも俺の右手には魔力が込められ、天井を吹っ飛ばしたものと比べ物にならない風を放つべく、今か今かと振動している。

「そこまでじゃ……」

「^{ゲイル}疾風……」

「やめんかバカタレ!!」

「ぐっはあああああ!？」

ギルド内を吹っ飛ばそうと呪文を詠唱をした瞬間、巨大な何かによって俺が吹っ飛ばされた。俺はそのまま慣性にしたがって飛び続け、ギルドに寄せられた依頼が張られたリクエストボードにめり込んだ。痛い。

ギルド内は一気に静まり返り、誰もが俺を吹っ飛ばした巨人の方を向いた。

「あら……いたんですか、マスター」

ミラの発言に、ルーシイが目を大きくしている。確かにこんなにでかい姿を見れば驚くよな。

「だーっはっはっはっ! みんなしてビビリやがって! この勝負は俺の勝ち……」

ぐちゃ、と嫌な音がしてナツが踏みつぶされた。マスター・マカロフはミラを見、その隣にいるルーシイを見つけて口を開いた。

「む、新入りかね?」

「は、はい……」

ルーシイは涙目になりながら答えた。マスターはふんぬううと声を漏らしながら、だんだんとサイズダウンしていく。やがてルーシイの腰ほどの大きさに“戻る”と、軽い感じで手をあげた。

「よろしくネ」

壮齡の者とは思えない身のこなしでギルドの二階へと跳び上がり……俺が^{ゲイル}疾風を発生させて軌道を変え、柵に激突させた。

「……まあよい」

マスターは腰をさすりながら柵の上に立つ。そういや最近腰痛がひどいとか言っていたつけ。まあいいや、気にしない気にしない。「まゝたやってくれたのう貴様ら。見よ、評議会から送られてきたこの文書の量を」

マスターの左手には何枚もの書類の束が握られていた。思わず「うぐ」と声が漏れる。俺だけではなく、心当たりのある者全員が、だ。このギルドの場合、ほとんど全員にあたるのだが。

「まずはグレイ。密輸組織を検挙したまではないが……その後街を素っ裸でふらつき、拳句の果てに干してある下着を盗んで逃走」

「いや、だって裸じゃマズイだろ」

「まずは裸になるなよ」

「エルフマン！ 貴様は要人護衛の任務中に要人の暴行」

「『男は学歴よ』なんて言うからつい……」

ああ、あれはこの前のやつか。

「カナ・アルベローナ。経費と偽って某酒場で呑むこと大樽十五個。しかも請求先が評議会」

「バレたか……」

「ロキ：評議員レイジ老師の孫娘に手を出す。某タレント事務所からも損害賠償の請求がきておる」

ここまでは、「やりすぎだろ」と傍観者に徹していた俺だが、マスターの次の説教の矛先はあろうことか俺に向かった。

「笑っている場合ではないぞルア。ミラのグラビア撮影の度に機材を壊しているのは貴様じゃな」

「や、だって他の奴なんかに見せたくないし」

俺の答えにマスターは「はぁ……」と大きく溜息をついた。俺に呆れているのもあるだろうが、それだけではない。ギルド最大の問題児は俺だけでなくもう一人いるのだから。

「そしてナツ……デボン盗賊一家壊滅するも民家七軒も壊滅。チューリー村の歴史ある時計台倒壊。フリージアの教会全焼。ルピナス城一部損壊。ナズナ溪谷観測所崩壊により機能停止。ハルジオンの

港半壊……」

出るわ出るわ、聞いただけでもとんでもない被害だ。ルーシィも顔をひきつらせている。多分、「本で読んだ記事はほとんどナツだったのね……」ってところだろう。

「アルザック、レビィ、クロフ、リーダス、ウォーレン、ビスカ……貴様らあ、ワシは評議員に怒られてばかりじゃぞお……」

マスターの体が震え、俯いた。ギルド内が沈黙に包まれる。

「だが……」

マスターの左手から炎が噴き出した。束となっていた書類が一瞬にして炎に包まれる。

「評議員などクソくらえじゃ」

ってか、リクエストボードに埋まってる場合じゃねえ。マスターが大事な事を言っている間に何とか抜けだし、ミラの元へ行く。どうせ評議員から難癖付けられる度に言っているんだ。まあ、何度聞いても感心できてしまうのはマスターの為せる業って奴かな。

「よいか、理を超える力は全て理の中より生まれる。魔法は奇跡の力なんかではない。我々の内にある“気”の流れと、自然界に流れる“気”の波長があわさり初めて具現化されるのじゃ。それは精神力と集中力を使う。いや、己が魂全てを注ぎ込む事が魔法なのじゃ。上から覗いてる目ン玉気にしてたら魔道は進めん。評議員のバカ共を恐れるな。自分の信じた道を進めェい！それが妖精の尻尾の魔導士じゃ！」

「わあ……」

隣で感心しているルーシィの肩にポンと手を置いた。

「妖精の尻尾へようこそ。歓迎するぜ、ルーシィ」

「ってことは、他の街じゃナツが火竜サラマンダーって呼ばれていたのか」

マスターの言葉に興奮した連中が宴を始め、俺はどんちゃん騒ぎから逃げるようにミラのいるカウンター席に座った。そこにいたル

ーシィから話を聞くと、ハルジオンでナツと中々衝撃的な出会いをしたらしい。

フェアリーテイル
「妖精の尻尾の火竜サラマンダーって言えば、結構有名になってるわよ」

雑誌なんかで俺らの起こした被害が紹介される時に一緒に火竜という名前が出てくるらしい。うーん、やっぱり雑誌とか読んだ方がいいのか。

「おまたせ」

ミラがスタンプを持ってやってきた。ルーシィにギルドマークを刻印するための物だ。ルーシィが差し出した右手の甲にポンと押すと、それで終わりだ。魔力のこもったスタンプなため、ちよつとやそつとの事じゃ消えない。

「わあ！ ナツ！ 見てー！ ギルドのマーク入れてもらっちゃったあ！」

「良かったなルーイージ」

「ルーシィよ！」

嬉しそうにマークをナツに見せる。それを見てワカバたちオヤジどもは鼻の下を伸ばしてルーシィを見つめていた。確かに可愛いもんなあ、ルーシィ。

「可愛いわよね、ルーシィ」

「あ？ まあな。でもやっぱミラが一番可愛いよ」

「あらあら」

「もしかして、二人って付き合ってるの？」

俺達を見てルーシィが驚いたように言った。思わず顔を見合わせる俺とミラ。少しびっくりしているミラが可愛い。

「ははっ、違うよ。別にそんなじゃないんだ」

「そうなの？ ……あっ、もしかして」

「ちなみに兄弟ってのも違うからな。よく間違えられるけど」

主に髪の毛の色のせいで。俺とミラ、エルフマン、そして二人の妹のリサーナはよく四兄弟だと間違われることがあった。実際、同じ時期にギルドに入ったからよく一緒にいたし、似たようなもんな

んだけどさ。俺達四人は……

そんな時だった。横の方から何やらマスターと言っている声が聞こえたのは。

「父ちゃんまだ帰ってこないの?」

「くどいぞロメオ。貴様も魔導士の息子なら、親父を信じて大人しく家で待っておれ」

「だって……三日で戻って言ったのに、もう一週間も帰ってこないんだよ……」

あの子は確か、マカオの息子のロメオだっけ。親父のロメオはハコベ山にバルカン討伐の依頼を受けに行ったはずだ。そう遠くは無いが……確かに一週間も音沙汰無しってのは怪しいな。

「探しに行ってくれよ! 心配なんだ!」

「冗談じゃない! 貴様の親父は魔導士じゃろ! 自分のケツも拭けねエ魔導士なんぞ、このギルドにはおらんじゃあ! 帰ってミルクでも飲んでおれい!」

そうマスターが切り捨てると、ロメオは涙を我慢しながらプルプルと震え、「バカー!」と一発マスターを殴ってギルドから出て行った。

「厳しいのね」

「ああは言っても、本当はマスターも心配してるのよ」

「そうだな。にしても一週間か。……マカオに何かあったのか」

ズビシと、何かがめり込む音がした。ナツが依頼書をリクエストボードにめり込ませた音だ。

「オイイ! ナツ! リクエストボード壊すなよ!」

ナブの小言にも聞く耳もたずといった様子で、黙々と荷物をまとめて歩き出すナツ。ハッピーが慌てて追いかけていった。

「マスター、ナツの奴、ちよつとヤベェんじゃねえの?」

どうでもいいがナブ、お前ちよつとは働いた方がいいんじゃないかねえの?」

「進むべき道は誰が決めることでもねえ。放っておけい」

マスターはニヤリと笑うとパイプをくわえた。

「ど、どうしちゃったの？ アイツ、急に……」

「ナツもロメオくんと同じだからね。自分とだぶっちゃったのかな」
「え？」

横ではミラがルーシィにナツの昔話を話そうとしていた。

「ナツのお父さんも出ていったきり帰ってこないのよ。お父さんって言うても、育ての親なんだけどね。しかもドラゴン」

「ナツってドラゴンに育てられたの！？ でもそんなの信じられるわけ……」

「あいつが小さい頃だ。そのドラゴンに森で拾われて、言葉や文化、魔法なんかを教えてもらったんだと。だがある日、そのドラゴンはナツの目の前から姿を消した」

気がつけば俺も口をはさんでいた。あいつらの気持ちは、よくわかる。今は伏せておくけど、俺だって、似たような事があったからな。

「そっか……それがイグニールなんだ……」

「ナツはね、いつかイグニールと会える日を楽しみにしているの。」

そーゆーところが可愛いのよねえ」

ミラは笑いながらも、どこか悲しげな表情で、グラスの中身を指でかき混ぜた。

「私たちは……妖精の尻尾の魔導士達は……みんな何かを抱えてる。キズや、痛みや、苦しみや……私も……」

「え？」

「ミラ……」

不安そうに顔を覗きこむ俺とルーシィを見て、ミラは笑った。やっぱり少し悲しそうな笑顔で。

「ううん、何でもない」

そう。俺達のギルドは、みんなそうだ。だから何よりも仲間を大切にするし、仲間のためなら命を張れる、そんな奴らばかりだ。

ミラだけじゃない、俺だって……

第1話 妖精の尻尾（後書き）

試験的に一人称形式で書いてみました。

そもそもFAIRY TAILという作品がルーシィの視点で描かれていること、

それとルアというキャラクターをつかんで欲しいということで書いてみたんですが。

ううむ、もうちょっとクールでかっこいい感じでもよかった気がするなあ。

基本的にルアはミラが愛しくて仕方ないのです。

第2話 火竜と猿と牛のち音楽

今、俺達はハコベ山を馬車で登っている。ハコベ山っていうのは春でも夏でも一年中雪が積もっている山で、色々な魔獣モンスターが生息していることで有名だ。マカオが討伐しにいったバルカンや、巨大な図体のわりに草食だというブリザードバーンとかな。

「でね！ あたし今度ミラさんの家に遊びに行く事になったの！」
ルーシイが楽しそうに話しているのを、俺は組んだ両腕に頭を乗せながら聞いている。

「下着とか盗んじゃダメだよ」

「盗むかつ！」

「ミラの下着を盗む奴あ、たとえ女の子でも容赦しないぜ」

「だから盗まないって！」

「ところで何でルーシイがいるんだ？」

馬車に揺られて早くもグロッキーなナツが、冷や汗びっしよりでうめくように言った。

「何よ、何か文句あるの？」

「そりゃもう色々と……」

「あい」

唇を突き出してぶーたれるルーシイ。ちなみに「あい」というのはハッピーの口癖みたいなものだ。

「だってせっかくだから、妖精の尻尾フェアリーテイルの役に立つ事したいな〜なんて」

ギルドを出てハコベ山へ向かうナツ達を見て、ルーシイは着いていきたそうな顔をしていたので、良ければ一緒に行こうかと俺が誘ったのだ。流石に新人とあのナツだけだと不安材料ばかりなので、自称妖精の尻尾唯一の良心である俺が行った方が良いだろうという判断。まあ本当はミラに頼まれたからなんだけどな。「ナツとルーシイの面倒見てあげてね。お願い」なんて手を合わせられたら、断

る方がおかしいってもんだ。

「それにしても、あんた本当に乗り物ダメなのね。なんか色々可哀想」

真っ青な顔でハアハア言っているナツを見ていると確かに可哀想だ。可哀想というより変態に見えるのは気のせいだ。

「マカオさん探すの終わったら、住む所見つけないとなあ」

「一応ギルドにも休む所があるから、しばらくはそこを使えばいい」

「オイラとナツん家住んでもいいよ」

「本気で言ったらヒゲ抜くわよ猫ちゃん」

ルーシイ、顔が笑ってない。

「ナツ達の家は結構散らかってるけど、ルーシイがどうしてもっていうならいいんじゃないか」

「そうだね。ルーシイがどうしてもっていうなら、仕方ないなあ。

ね、ナツ」

「お、おう……」

「あれー！？　なんか私があんた達の家に住みたいってわがまま言ってることになってる！？」

「あなた達、本当にルーシイをからかうの好きね……」

ルーシイはからかうと本当に面白いな。からかわれているルーシイと呆れているカームには悪いが。

と、突然ガタンと馬車が揺れ、動きが止まった。

「止まった！」

一瞬でナツが生き返る。相変わらず復活の早さが尋常じゃ無いな。普通酔ってる症状ってしばらく続くもんじゃないか？

「着いたの？」

ナツとルーシイがキョロキョロとあたりを見渡す。もっとも窓はカーテンを閉めてるため外の様子は何も見えないのだが。

すると鼻をすすする音と共に御者の死にそうな声が聞こえてきた。

「す、すみません……これ以上は馬車じゃ進めませんわ」

ってことは、ハコベ山に到着か。扉を開けて外に出たルーシイが

驚いている。

「いくら山の方とはいえ、今は夏でしょ!？　こんな猛吹雪おかしいわ!」

だがそれがハコベ山だ、ルーシィ。ナツはその体質上大丈夫そうだし、ハッピーやカームも何だかんだで寒さには耐えられそうな感じだな。俺はそんなに強い方じゃないが、泣き言は言ってられない。だがルーシィの薄着は流石にまずいよな。

「さ……寒っ!」

「そんな薄着してっからだよ」

「あんたも似たようなものじゃない!」

まあ、ナツだし。

「そんじゃオラは街に戻りますよ」

そういつて御者は手綱を引き、来た道をUターンさせて帰っていた。

「ちょっとオ!　帰りはどーすんのよ!」

「あいつ本当うるさいな」

「あい」

「まあ、そういつてやるなよ。おいルーシィ」

声をかけると、大人しくルーシィはやってきた。あーあー、女の子が鼻水垂らしてちゃせっかくの綺麗な顔が台無しだろうに。

「ほら、貸してやるから、これ着てろ」

そういつてマントを脱いで貸してやる。

「い、いいの!？　ありがとうルアああ!」

頷くとルーシィは感激しながら御礼を言いつてマントにくるまった。とにかく涙と鼻水を拭きなさい。

「あなただつて寒いんじゃないの?」

「女の子を凍えさせるよりはマシだつて。ミラにも頼まれたしな」

カームは溜息をつきながら俺の頭にのるが、微笑んでいた。一応俺の方が年上なんだけど、カームのこの年上の余裕みたいな態度はどうしても勝てない。猫の年齢とかよくわかんないけど。

「ひひ、ひ、開け……ととと時計座の扉！ ホロログウム！」

ルーシイはそれでもまだ寒いようで、鍵を取り出すと門を開け、
その場に時計座の星霊を召喚した。ということは、ルーシイは星霊
魔導士なのか。結構話したけどそういえばルーシイがどんな魔法を
使うかは全く聞いていなかったな。

ルーシイはマントにくるまると、ホロログウムの中に入ってしまった。

「『あたしここにいます』と申しております」

中にいるルーシイとの会話はホロログウムが仲介役になることで
可能らしい。

「何しに来たんだよ」

「『何しに来たといえ、マカオさんはこんな場所に何の仕事をし
に来たのよ！』と申しております」

あれ、ルーシイは知らなかったのか？

「知らねえで着いてきたのか？ 凶悪モンスター“バルカン”の討
伐だ」

ルーシイの顔が青くなったように見える。寒さのせいだけじゃな
いだろう。

「『あたし帰りたい』と申しております」

「はい、どうぞと申しております」

「あい」

「まあまあまああ」

二人（三人？）の掛け合いが面白いので俺は傍観役に徹してみる
ことにする。とにかくマカオを探さないと。歩き出す俺達の後ろ
から、ホロログウムがひよこひよこ足も無いのについてくる。ど
うやって動いてんだアレ。

「マカオー！ いるかー！？ バルカンにやられちゃったのかー！
？」

ナツが大声で叫ぶが、この猛吹雪じゃ例えマカオがいたとしても
聞こえやしないだろう。

だが、何やら遠くで雪を踏みしめるような音がする。その音はだんだんと近づいてきた。俺とナツは目を合わせ、音がする方を目を凝らしてみる。

その瞬間、巨大な何かが降ってきた。間一髪、後ろに飛んでかわす。俺たちに飛びかかってきたのは、ゴリラによく似た大きな生物、バルカン。臨戦態勢を整える俺たちだが

「ウホッ！」

バルカンは奇妙な声をあげると、俺達を無視して俺達の後ろの方へ走っていった。

「まずい、後ろにはルーシイが……」

「人間の女だ！」

バルカンはホログウムを捕まえると、下劣な笑みを浮かべながら中にいるルーシイを見つめる。ルーシイは悲鳴をあげる。が、聞こえない。ホログウムもあせっているのか、ルーシイの悲鳴を俺達に伝える事は無かった。

「うほほー！」

バルカンはホログウムを小脇に抱えるところかへ走り去っていく。

「おお、しゃべれんのか」

「あい」

「着眼点違うだろ。バルカンってエロかったんだな」

「あなた達、こんな時まで……」

「『つてか助けなさいよオオオオ！』と申しております」

ホログウムの声が遠くからぼんやりと聞こえる。

「しゃーねえ、助けに行くか！ ハッピー！ ルア！ カーム！」

「あいっ」

「おう！」

「ええ！」

ルーシィは後悔していた。ナツは強いし、ルアは優しいから、何の心配もしていなかった自分がバカみたいだ。ホロログウムの中でルーシィは興味本位で着いてきた自分を呪った。

「どうしてこんなことになってるわけ……」

「私に申されましても……」

ここはおそらくバルカンの住処。バルカンはドラミングや口笛を吹きながらホロログウム（中のルーシィ）の周りを飛び回っている。物凄いはしゃぎようだ。

「あの猿、何かテンション高いし！　もう……ナツとルアはどうしちゃったのよお」

あの二人に頼り切っているのはどうかと思うのだが、この現状をどうにかするにはあの二人が助けにくることを祈るしかない。どうか二人が早くこの場所を見つけて来ますようにと祈っていると、目の前にバルカンの顔がある。

「きゃあ!？」

ルーシィは飛び退くが、ホロログウムの中にいるためバルカンとの距離は変わらない。

「女!」

当のバルカンは鼻の下をこれでもかと伸ばし、頬をデレデレと真っ赤にさせてルーシィを見ている。ガラス越しにキスでもしてしまいたいような勢いだ。ハアハアというバルカンの粗い息遣いでホロログウムのガラスが曇る。

と、その瞬間、「ぽんっ」という軽い音と共にホロログウムの姿が消え、ルアのマントにくるまるルーシィがバルカンの前に無防備で投げ出された。

「ちょ、ちよっとお！　ホロログウム！　消えないでよお!」

「時間です。ごきげんよう」

「延長よ、延長！　ねえ!」

不格好な耐性で後ろにさがるルーシィ。じりじりと距離をつめていくバルカン。生理的に受け付けない嫌悪感と恐怖に思わず涙が出

そうになる。

「うおおお！ やっと追い付いたああ！」

「ナツ！」

洞窟の中へ走ってくるナツとルア。二人の姿を見た瞬間、ルーシイは何とも言えない安心感に包まれた。バルカンに襲われる寸前と言う状況は全く変わっていないのだが。

「マカオはどこだああああああああああ！？」

凍った地面に足を滑らせ、ナツは体操選手さながらの見事な大車輪を見せてルーシイとバルカンの間に割って入った。

「ルーシイ、大丈夫？」

「カーム！ ルア！」

「遅くなって悪い。あの猿に何かされなかったか？」

「あたしは平気。けど、ナツは大丈夫なの？」

地面に顔を思い切りこすりつけたナツを見て、ルーシイが顔をひきつらせながら聞く。だがルアが答える前にナツが飛び起き、バルカンに掴みかかった。

「おい猿！ マカオをどこに隠した！ 人間の男だ、男！」

「ナツなら大丈夫だよ。な」

「う、うん、そうみたいね……」

「のわああああああああああああああ！」

「ナツー！」

遠くなっていくナツの叫びに、二人が振り返った。そこには洞窟の壁に開いた穴の外を眺めるバルカン。ハッピーはナツの名を叫びながら外へ飛び出していった。

「ウホッ、男いらん。オデ、女好き」

「ナツ！ ちょっと、死んでないわよね！」

「ああ見えても結構やる奴だ、そう簡単にはくたばらねえよ」

慌てて穴から外を覗きこむ二人。どうやらここは断崖絶壁の中腹にある洞窟らしく、穴の外は地面が見えない。ここから落ちたとしたら、普通の人間ならまず生きてはいない。

「……大丈夫、よね」

「……多分」

「男いらん！ 男いらん！」

バルカンは次の獲物をルアに決めたようだ。太い腕を振り下ろしてルアも落とそうと躍起になっている。

「チィ！ 疾風^{ゲイル}！」

手から風をおこし、バルカンを押し戻す。風魔法は攻撃範囲が広い代わりに与えるダメージが少ないのが欠点だ。攻撃魔法でも中々決定打になりにくい。

「かといって、こんな狭い場所じゃ、でかい魔法使ったらルーシイもヤバイしな……」

「大丈夫、あたしも戦うわ！ 女、女って、このエロザル！ ナツが無事じゃなかったらどうしてくれるのよ！」

ルアの隣に立ったルーシイは、ベルトから下がったホルダーから一本の鍵を取り外した。特徴的な模様が刻まれた、黄金の鍵だ。

「開け、金牛宮の扉……タウロス！」

「MOオオオオオオ！」

ルーシイの命令と共に開かれた門から現れたのは、巨大な斧を背負った牛の星霊だ。

「それ、黄道十二門の鍵？」

「そ！ あたしが契約してる星霊の中で、一番パワーがあるタウロスが相手よ！」

凄まじい筋肉を見せつけているかのような、鍛え上げられた上半身。背負った斧も相まって、そこから繰り出される攻撃の威力は相当なものだろう。戦闘向きでとても頼りになる星霊だとルアは思った。

「ルーシイさん！ 相変わらずいい乳してますなあ！ MOーステキです！」

ただし、バルカンのように鼻の下を伸ばしてルーシイの胸を見つめていなければ。

「そうだ……コイツもエロかった……」

「星霊って、結構キヤラ立ってんなあ……」

「ルア、感心する所じゃないわよ」

しかしバルカンは、ルーシィ（の胸）にデレデレしているタウロスを見て憤慨している。

「ウホッ！ オデの女とるな！」

“オレの女”……？ そいつはMO聞き捨てなりませんな」

その言葉を聞き、タウロスは目つきを変えてバルカンに向き直った。その姿はさながら、姫を守る騎士のようだ。

「そうよ！ タウロス、あいつをやっちゃって！」

“オレの女”ではなく、“オレの乳”と言ってもらいたい！」

「もらいたくないわよ！」

前言撤回、ただのエロ牛だ。ルアはこのエロ牛を騎士に例えた自分がバカみたいに思えた。

「はあ……ルーシィ。魔力の方は大丈夫か？」

「ちよっと心配。でもこの牛を速攻で倒して、早くナツを探さなきゃ」

「そうだな。突風！」ガスト

ルアは両手を後ろに向け、突風を放つ。その勢いを利用して一気にバルカンに近づくと、ルアの接近を許してうろたえているバルカンの顎に右足を蹴り入れた。

「タウロス！」

「MOオオオ！」

タウロスは斧を持ち、バルカンに振り下ろした。流石にバルカンもやられっぱなしではないのか、斧の柄をつかんで攻撃を止める。

「突風！」ガスト 疾風の槍手！」

右手から突風を出して加速、左手に螺旋状の風を纏い、バルカンの顔を貫こうとした、その時――

「うおおお！？ なんか化け物増えてんじゃねえか！」

「MOオオオオオオ！」

突然現れたナツに思い切り殴り飛ばされ、タウロスはその場に倒れ伏した。予想外の事態にルアは魔力の発動を止め、バルカンの動きも止まる。

「人がせつかく心配してあげたのに、何すんのよ！……てか、どうやって助かったの？」

そこへナツの後ろから翼を生やしたハッピーが現れた。

「ハッピーのおかげさ。ありがとうな」

「そっか、そういえば羽があつたわね」

「あい、能力系魔法の翼です^{エーラ}」

「ていうかアンタ、乗り物ダメなのにハッピーは大丈夫なのね」

「何言ってるんだお前。ハッピーは乗り物じゃなくて『仲間』だろ。ひくわー」

「そ、そうね、ごめんなさい……」

ナツはあからさまにどん引きした表情をしている。

「ウホオオオオオッ！」

ようやく邪魔者が入ったことを理解したのか、バルカンは雄叫びをあげて走り出した。だが、その直線状にいるナツは後ろを振り向こうとしない。

「いいか、妖精の尻尾のメンバーはみんな仲間だ^{フェアリーテイル}」

「来たわよ！」

「じっちゃんもミラも、うぜエ奴だがグレイもエルフマンも」

「ナツ！ 行ったぞ！」

「ハッピーもルーシイも、みんな仲間だ。だから……」

ナツは拳に炎を宿しながら、振り返る。バルカンはすぐ目の前に迫っていた。

「火竜の鉄拳！！」

炎の拳はバルカンの腹部に直撃。バルカンはそのまま吹っ飛び、洞窟内の壁の穴にはさまった。

「俺はマカオを連れて帰るんだ。早くマカオの居場所を言わねえと黒コゲになるぞ」

「ていうかもう、伸びてるけどな」

「なっ……しまったああ！」

自身の魔力を炎に変え、拳に宿して敵を殴る滅竜魔法、火竜の鉄拳。竜撃退用の強烈な一撃をまともに受けて、バルカンが無事であるはずがない。三人と二匹が見守る前で、バルカンの体はだんだんと変化し始めた。

「えっ……!？」

「猿がマカオになったー!？」

バルカンは見る見るうちにマカオの姿へと変わっていき、サイズダウンしたことでマカオは壁に開いた穴からふらっと風に揺られ、落下していく。

落ちるマカオの足をつかむナツ。だがナツも勢いに乗って落ちそうになってしまう。慌てて翼^{エーラ}を出したハッピーが追い掛け、ナツの足をつかんだ。

「二人は重いよ……!」

「ハッピー!」

同じく翼を出したカームもハッピーと一緒にナツの足をつかむ。

「くっ……」

「重い……!」

ルアとルーシイもそれぞれカームとハッピーをつかんで、どうにか引っ張り上げる。

「はあ……はあ……ていうかこういうの、タウロスが適任だろ……」

「うう、ごめんなさい。肝心な時に伸びてるし……」

「いや、元はと言えばナツが殴り飛ばしたのが悪いんだし」

「なっ!? その牛、仲間だったのかー!？」

「それよりも、今はマカオさんでしょ!」

ルーシイはカバンから救急箱を取り出すと、ハッピーとカームが心配そうに寄り添っているマカオの元へ急いだ。ナツとルアも彼女に続く。

マカオは全身に切り傷や打撲痕が見られ、特に脇腹の傷がひどく、

出血も多かった。

「バルカンは人間を^{テイクオーバー}接收する事で生きつなぐ魔物だったのか……」

「^{テイクオーバー}接收される前に激しく戦りあったみたいだな」

「ダメ、脇腹の傷がひどすぎて、持ってきた応急セットじゃ間に合わない……」

出血が止まらない。バルカンに傷を負わされて、その上接收されて三人と戦ったのだ。助かる見込みは絶望的だ。

そんな中、ルアは一人落ち着いていた。

「カーム、魔笛を出してくれ。それからナツ、止血を頼む」

二人はその言葉に頷き、ナツは手に炎を纏ったかと思うと、その手をマカオの傷口に押し当てて。ジュツという何かが溶ける音と、マカオの叫び声。

「何してんのよっ！」

「これしかしてやれねえんだ！ 我慢しろよマカオ！ ルーシィ、マカオ抑えてろ！」

火傷させる事で傷口を無理矢理ふさぐ。こうする事でこれ以上の失血は防ぐ事が出来る。

出血が収まったのを見て、ルアはカームが取り出したオカリナのような楽器を口にあて、息を吹き込んだ。

^{ヒール・オカリナ}
「治癒笛」

冷たく凍った心を融かすような、暖かい音色が洞窟内に響き渡った。だんだんとマカオの苦痛の表情が和らいでいく。

「ルア、それは？」

「これは中に魔水晶^{ラクリマ}が入った魔笛、オルフェ・オカリナ。使用者が吹きこんだ魔力によって様々な効力を発揮する音魔法用の魔導具だ。マカオ、死ぬんじゃないぞ。ロメオが待ってんだ」

「ふぐっ……あ……」

マカオの目が少し開いた。ルアの魔法のお陰で回復しているとはいえ、傷はまだ完全にふさがっていない。

「情けねえ……十九匹は倒したんだ……だが……二十匹目で^{テイクオーバー}接收さ

れ……ぐあっ」

「黙ってる！ 傷口が開くだろうが！」

「ムカつくぜ……畜生……これじゃ……ロメオに合わす……顔が……ねえ……」

「黙れっての！ 殴るぞ！」

ナツがマカオの傷口を強く、しかし包み込むように手で覆う。ルアはオカリナに込める魔力をさらに強めた。

そんな二人を見て、ルーシィは思わずルアの裾をつかんだ。オカリナを吹くルアが彼女に視線を移す。

「すごいなマカオさん……やっぱり、かなわないなあ……」

「……ルーシィも立派な俺達の仲間だ。これからだよ」

ポント、ルーシィの頭に手を置く。

オカリナの音色はそれからしばらく鳴り続けていた。

「いいの、ルアはロメオ君の所に行かなくて」

「いいんだよ。俺は別に何もしてないしな」

フェアリーテイル

妖精の尻尾に帰ってきた俺は、定位置と化しているミラの目の前のカウンター席に座っている。今頃ナツとルーシィとハッピーがマカオをロメオの所へ連れて行っているはずだ。

ヒール・オカリナ

治癒笛で多少回復しているとはいえ、先に本格的な手当てをした方がいいのだが……まあ、息子の前でくらい、かつこつけさせてやらないとな。

「で、どうだった？ ルーシィ」

何だか嬉しそうな表情でミラが聞いてくる。

「黄道十二門の星霊とも契約しているみたいだし、連続で魔法を使えるくらいの魔力はある。そこそこ戦えるし、しっかりしてる。暴走しがちなナツのストッパーにもいいんじゃないかな」

「なら良かった」

ミラの出してくれた一口飲む。ううん、美味しいといえば美味しいが、

やっぱりアルコールは苦手だ。こんな事を言ったらカナにドヤされるのが目に見えているが。

「ルアー！ ロメオ君が、ルア兄にもありがとうって！」

フェアリーテイル
妖精の尻尾は今日も賑やかな魔導士ギルドだ。

第2話 火竜と猿と牛のち音楽（後書き）

タウロスの出番とっちゃった。

ちよつと長い気がするけどまあいいや。

基本的に原作1話分の範囲を1話として掲載していく感じです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5182w/>

FAIRY WIND ～妖精は風の中で笑う～

2011年9月16日03時22分発行